

月刊 **みんぱく**

2月号

2025



特集
書なの？ 画なの？

巻頭エッセイ
本田孝一


UCHIDA
9.51

「私に葦の筆をください、そして歌ってください。」

ほんだ こういち
本田 孝一

アラビア書道家

プロフィール

1946年生まれ。東京外国語大学アラビア語学科卒業。日本アラビア書道協会会長。アラビア語とアラビア書道をライフワークとする。アラビア書道作品は大英博物館、メトロポリタン美術館、シンガポールアジア文明博物館など世界各地の美術館に所蔵されている。主な著書に、『アラビア語の入門』（白水社）、『パスポート初級アラビア語辞典』（白水社）、作品集『アラビア書道の宇宙』（白水社）、『たのしいアラビア語』（1～10巻、たまいらぼ他）、作品集『Nuur Ala Nuur』（イスラム芸術博物館マレーシア）など。2024年、UAEの「カンズ・アルジール賞」（クリエイティブ・パーソナリティ部門）受賞。

か つてレバノンの詩人ハリール・ジブラーン（一八八三～一九三二年）は、「私に葦の筆をください、そして歌ってください。」と詠んだ。私はアラビア書道家なのでおがましいが、それをもじって右のように詠みたい。アラビア書道は葦の筆で書く。日本の横笛に似ている葦笛は「ナーイ」と呼ばれる。葦の筆は「カラム・ポーサ」という。川辺に生えている雑草のような葦の茎から、美しい音を生み出す笛が作られ、美しい文字を生み出す筆が作られる。何と自然で、素朴で、すばらしいことか。

アラビア書道の筆は基本的に書家が自ら作る。文房具店などで売っているものではない。書家が一本一本心を込めて作る。しかし作り方はいたってシンプル。細い葦を採ってきて、よく天日で乾かす。葦の茎ははじめ脆くて柔らかいが乾燥すると硬くなる。葦の代わりに竹でもよい。日本では葦よりも竹の方が多く見受けられるので私は竹を使っている。家の庭などに自生している細い竹（女竹「メダケ」と言われているもの）を採取している。エジプトに滞在していた時は、カイロのホテルの裏がナイル川だったので河岸に降りて葦を採取したこともある。筆は、茎の先端を鋭利なナイフで斜めに切り落して筆先を作る。それに墨を付けて書く。そのような簡単な作りの筆を使って書かれるアラ

ビア書道はいつ、どのようにして生まれたのであろうか。その答えはどうしてもイスラム教を切り離して考えることはできない。西暦七世紀の初めアラビア半島で興ったイスラム教は、神（アッラー）の言葉を記したとされる『クルアーン』（コーラン）を携え、アラビア半島から西へ、東へ布教活動を展開していった。印刷技術のない当時、『クルアーン』はすべて手書きであった。そこに「アラビア書道」の濫觴（らんしょう）を見ることができた。そこに「アラビア書道」の濫觴（らんしょう）を見ることができた。書き手は神の書である『クルアーン』をそれに見合うだけのより美しい、完全な文字で書くことを自らに課した。そこに書家なる職業が生まれ、書道という芸術が生まれ、発達していったのである。その伝統は以来一〇〇年以上にわたり現代までも途絶えることなく続いている。

アラビア書道は近年、高尚な文字芸術として世界中の人々から関心を集めている。日本でもアラビア書道を手掛けている人が増えて、ひそかなブームになっている。アラビア語を分らない人がほとんどなのだが、「なぜアラビア書道を始めたのですか。」と尋ねると、一様に「文字が世界一美しいからです。」との返事が返ってくる。私がアラビア書道を始めた四〇年前頃は「あなたは変人・奇人ですね。」と言われたものだが、時代は変わったものである。

月刊 みんなの 2025年 2月号

表紙

イザベラ・ウフマン作
「メタモルフォシス」2021年
© Izabela Uchman
古代エジプトのケプリ神（スカラベ）の背にアラビア語で「変化する」を意味する単語を左右対称にあしらった作品。アラビア文字の意匠は「統一」を意味するヒエログリフにもなっている（H0328167）

*本文中、撮影者・提供者を記載していない写真は執筆者の撮影・提供によるものです。

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

- 巻頭エッセイ
「私に葦の筆をください、そして歌ってください。」
本田 孝一
特集 書なの？ 画なの？
- アラビア文字をかくこと
相島 葉月
- 書家サラーフ・アブデルハーレクの世界
坂東 和美
- ハサン・マスウーディのアラビア書道哲学
エモン・クライル
- 文字を作る、文字を選ぶ
吉岡 乾
- ピンクリッシュでつながる「イラン」
橋原 敦子
- レターリアリティの表現世界
永井 正勝
- グラフィックデザインとしてのアラビア書道
相島 葉月
- みんなく回覧板
- 押しコレ図鑑
立ちあがれ！ ザンジバルドアー
鈴木 英明
- もっと、みんなく
ソロモン諸島で貝殻のお金をつくる
藤井 真一
- 世界の「乗っちゃえ！」
船とボートとカヌーを乗り継ぐ島人の人生
佐本 英規
- だって調査だもの
リーブ・ミー・アローン
西川 慧
- ばくっ！とフィルめし
シッキムの金色のトウモロコシ
山岸 哲也
- 今月号の地図・編集後記



アラビア書道をあしらったイスラーム神秘主義者の聖者廟
(エジプト、2007年)

「書は肉体という道具で表された精神的な技術である」という格言は、肉体と精神を対比しつつ、両者のつながりを示唆している。手仕事に集中したせいか、なぜか爽快な気分が帰宅した。

識字能力のないイーヨーはあくまでもAの形を真似ただけであって、Aを書いたとはいえないとインゴルドは論じる。
アラビア語の読み書きができるとはいえ、竹筆を手にとったわたしには、イーヨーが木の枝を並べたときの気持ちが良くわかった。アラビア文字を手で書いたり、スマホで打ったりすることを日常的にしているものの、墨汁に浸した竹筆がまったく思うように動かない。アラビア書道の美しさを象徴する、エッジのきいたシャープな線が一本も引けない。ダイアモンドのような形であるはずの点がひしゃげてしまう。お手本にとらめっこしながら、ひたすら文字の形をなぞるしかできなかった。手で新しいことをするのが久しぶりということもあって、余計に脳と身体がつながらなかったのだ。

「書かないとだめだよ」

エジプト人書家ムハンマド・ハマームについてのドキュメンタリー映画「書家の仕事場」(ナタリヤ・ドワーク・キンテロ監督、二〇一七年)に印象的な場面がある。ハマー

二度目にマレーシアで参加した日本アラビア書道協会の会員向けの講習会で、クルアーン(コーラン)第一章二節の「万有の主アッラーにこそ凡ての称賛あれ」と書かれたお手本を前にし、わたしは途方に暮れた。他の参加者はアラビア語が読めないのに、まるでクルアーンを誦読するかのようになり、スラスラと美しい文字を書いている。「書は手の舌である」という書家に伝わる格言を援用するなら、わたしの手はしどろもどろだった。筆運びの秩序を見出だせず、迷走していた。
しかし書き続けるうちに、書体が身体にしみ込んでくるのを感じた。気づけば、書いていたクルアーンの一節はアラビア語の音となり、身体中をぐるぐると駆け巡っていた。同じフレーズを何度も繰り返し唱えるイスラーム神秘主義の儀礼をズイクル(祈禱)とよぶ。ふと、アラビア書道は手のズイクルなのかも知れないと思った。

アラビア文字をかくこと

「かくこと」を考える

古代エジプトでは、文字を書くことと絵を描くことを一つの語彙で表現したとされる。文字をモチーフとした芸術である書道は、それを現代に実践する例のひとつだ。

アラビア書道は、書体ごとに厳密に決まっている幾何学的な法則と尺度に則って、文字を「書く／描く」。書家の引く一本一本の線が文字となり、画となる。二次元であるはずの作品のなかで、文字は音を奏で、踊りだし、三次元のイメージが立ち上がる。くしくも日本語では文字を書くことと



「スルス書体の手本」という体裁をとった作品。白い点で文字の幾何学的な比率と筆の動きを示している
ハマダー・ファーイズ・イブラーヒーム作「クルアーン第52章48節」ヒジュラ暦1445年(西暦2023年)(H0328245)

絵を描くことを、ともに「かく」と発音する。漢字での表記の違いを一旦忘れて、「かくこと」そのものについて、少し考えてみたい。

脳と身体が繋がらない？

初めて竹筆を持ってアラビア書道に挑戦したとき、「文字を書く」という行為そのものを学び直す体験をした。文化人類学者のティム・インゴルドは『ラインズ——線の文化史』のなかで、『くまのプーさん』の友人であるロバのイーヨーが三本の木の枝をAの形に地面に並べるシーンを例に、「イーヨーは文字を書いたことになるのか？」と問うた。

あいしま はつき
相島 葉月
民博 准教授

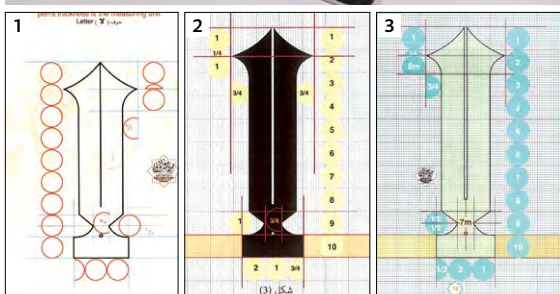
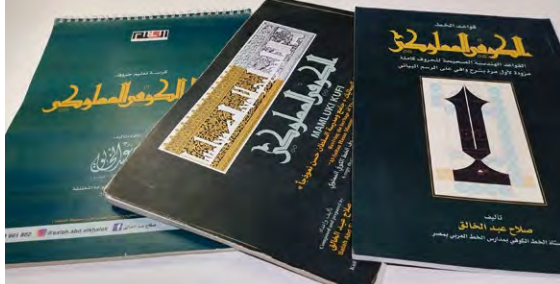
左頁上: マレーシア・イスラーム美術館の講習会で使用した手本と筆(2024年)
左頁下: ムハンマド・ハマーム氏が赤色の1面記事タイトル「石油は人道支援の武器である」を担当したリビアの「アル=ファジュール・アル=ジャディード紙(1974年7月8日)」(中西コレクションC942382210)



ムは弟子の作品を手でなぞりながら、「ここ描いているよね? 書かないとだめだよ」と批評した。クルアーン朗誦が歌っているように聞こえても「キラア(読書)」とよばれるように、アラビア書道はヴィジュアルアートとはいえ、文字を描くのではなく、書くのだ。本特集では、アラビア文字をめぐるグローバルな状況とアートとしての展開をとおして、書と画の関係について考えたい。アラビア文字を用いてことばをあらわすとはどういうことか、それはテクノロジによっていかなる制約と可能性をもつか。書なのか、画なのか、文字によって表現するとは、いったい何であろうか。

本田孝一は文字の払いを一筆で書くことに重きを置くことから、竹筆の素材と削り方に改良を重ねている。右端の最新版は、軸をプラスチックにして指先での回転をスムーズにし、竹部分の筆先を熱してひねりを加えている(個人蔵)





マムルーク・クーフィー体の書法整備の一例。プロポーションの調整とともに、学習者の理解を容易にするための改良がおこなわれてきた
時系列順に1(2021年)→2(2023年)→3(2023年)
(マムルーク・クーフィー体の教科書から引用)

アブデルハーレクによるマムルーク・クーフィー体の教科書
(エジプト カイロ、2024年)

使用される主要な書体のひとつである。滑らかで曲線的なナスフ体やスルス体とは対照的に、角ばった幾何学的な線形を特徴としている。書道用のペンのみで書く他の書体と違い、定規や円定規、方眼紙などを用いて文字の輪郭を描くというレタリング的な手法で書かれる場合が多い。

クーフィー体はイラクの都市クーファから広まったとされ、八〜一世紀ころの初期のクルアーン写本に多く用いられた書体である。しばしば植物文様などを伴って書かれ、地域や表現媒体によってさまざまな

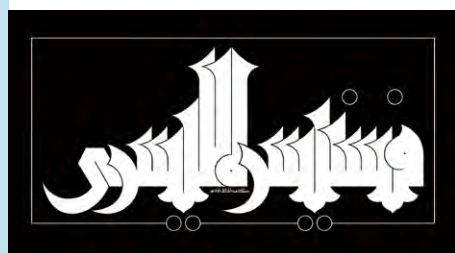
スタイルが作られた。だが、一二世紀以降は建物や写本の装飾などに利用が限定されていった。

いっぽう、エジプトでは一九世紀末からイスラーム建築の組織的な調査・修復作業がおこなわれるなかで、再びクーフィー体への関心が高まった。二〇世紀に入ってから書法がまとめられ、カイロの書道学校などでも教えられる、という形で復活を遂げる。同時にグラフィックデザインの分野でも同書体が使用されるようになった。

クーフィー体を追い求める

クーフィー体の復活後、アブデルハーレクはカイロの書道学校で学んだ。卒業後は新聞社などの書家兼デザイナーを務め、書道学校でも教鞭をとっている。クーフィー体に他の書体にはない芸術性を感じた彼は、二〇世紀エジプトを代表する書家ムハンマド・アブデルカード（一九一七〜九四年）に師事し、同書体を学んだ。しかし、彼の書家としての活動は師から学んだクーフィー体を単に活用するだけではなかった。

例えばカイラワーン・クーフィー体。この書体はチュニジアのカイラワーンにある大モスクで発見された古いクルアーン写本の書体を元に書法がまとめられたものである。



サラフ・アブデルハーレク作「そういう者には我らが安らぎの道をいと容易くしてやるぞ」(クルアーン第92章7節、マムルーク・クーフィー体、アブデルハーレク氏提供)



坂東和美作「時を過ごす中での最良の同伴者は本である」2022年(アラブの詩人ムタナビーの詩の一節、マムルーク・クーフィー体)

彼は独学ののち、チュニジアまで専門の書家の手ほどきを受けに行った。

あるいはマムルーク・クーフィー体。カイロにある一四世紀のマムルーク朝期に建てられたスルターン・ハサン・マドラサの主イーワーン(前面開放型のホール)壁面に彫られたクーフィー体の銘文を彼は分析し、あらたに書法をまとめ、マムルーク・クーフィー体と名付けて出版した。出版後も書法の微調整をおこないながら、国内外のワークショップなどで教えている。

このように彼は古い書体を追い求め、それらを新しく使いやすい書法にまとめ、積極的に発表してきた。彼の挑戦は今後もクーフィー体のあらたな可能性を示してくれるだろう。



上: スルターン・ハサン・マドラサの中庭から主イーワーンを臨む
(エジプト カイロ、2024年)
下: 主イーワーンにある銘文。「慈悲ふかく慈愛あまねきアッラーの御名において／見よ、我ら、汝に輝かしい勝利を与えたぞ」(クルアーン第48章1節)。アブデルハーレクが銘文の文字を分析し書法をまとめ、マムルーク・クーフィー体と名付けた
(エジプト カイロ、2024年)



サラフ・アブデルハーレク作「アッラー以外に神なし」ヒジュラ暦1437年(西暦2015〜16年)(H0328244) ファーティマ・クーフィー体を用いた作品。ミフラーブ(モスク内にあるメッカの方向を示すくぼみ状の設備)の形にデザインしたシリーズの作品のひとつ



エジプトの書家サラフ・アブデルハーレク。手元と壁の作品はどちらもファーティマ・クーフィー体を用いた作品(エジプト カイロ、2018年、アブデルハーレク氏提供)

書家サラーフ・アブデルハーレクの世界

ばんどう かずみ
坂東 和美 アラビア書道家

書家アブデルハーレクとの出会い

二〇二〇年コロナ禍の夏、わたしはカイロでアラビア書道のオンライン・ワークショップに参加した。概要を学びながら、同時に学んだ文字を書いて写真に撮りメッセージングアプリに送って、その場で講師の添削を受けるというものだった。どれだけ正確に素早く書いて提出するかを参加者同士で競うような雰囲気もあり、毎回必死になって文字を書いていることになった。そのとき学んだ書体がわたしにとってはじめてのクーフィー体、カイラワーン・クーフィー体であり、講師である書家サラーフ・アブデルハーレクとの出会いだった。

クーフィー体の復活

クーフィー体とは、現在アラビア書道で



ハサン・マスウーディー作「影」1999年(H0328309) ハサン・マスウーディー作「月」2018年(H0328306)
ともに、俳人山口素堂の「われをつれて我影帰る月夜かな」に着想を得た作品だが、モチーフとなる語が異なる

人であることの意味を探る

彼は一九七〇年代にパリで日本の前衛書道と出会い、アラビア書道の美しさを再発見した。日本語がわからない彼に、書は語りかけた。日本語であれアラビア語であれ、書は世界の仕組みを内側から露にすること

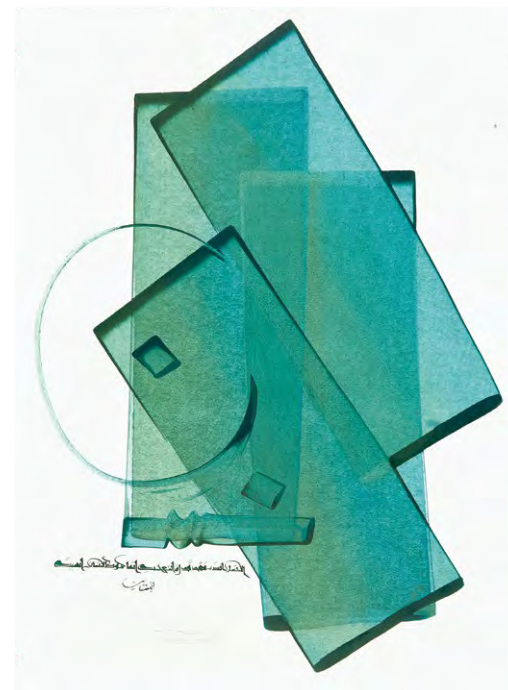
ができるのだ。モノの形は幾何学的な比率のうえに成り立っており、人間の始原の記憶や根源的な経験との深い感情的なつながりを喚起する。それゆえに作品にかかれた言語を理解しない人に対しても強い印象を与える。彼はフランスの抽象美術の画家とは対照的に、ことばを捨ててなかった。彼の作品には中央に一つの語が、書というよりは画に見える独特のスタイルで、下部に古典的なアラビア書道で一文が記される。作品を構想するにあたっては、彼の感性に訴える文学や偉人のことばをアラビア語に翻訳し、それに合ったものとも魅力的な語を選ぶ。同じ語でも伝えようとする意味が違いため、作品により表現が異なる。例えば、作品①と②は同じく中央にアラビア語で「人」という語が書かれている。作品①は垂直性を強調した二本の線を背景に、斜めの線が世界を見上げるかのように前傾している。一方で、作品②は大きな円が中央にかかれた「人」を囲い、閉じた印象を受ける。前者にはアインシュタインのことばが添えられているのに対し、後者は「人」とだけ書いてある。人であることの意味の探求が、マスウーディーの芸術活動の根底にあることを示す好例の作品である。



ハサン・マスウーディー作「女」1991年(H0328341)
イスラーム神秘主義詩人ルーミーの「女性には神からの一筋の光である」に着想を得た作品。上部の斜めの線で太陽の光を、丸みを帯びた線で女性性を表現している



作品② ハサン・マスウーディー作「人」2002年(H0328305)
①と②はアラビア語で人を意するالانسان(アル=インサーン)がモチーフとなっている



作品① ハサン・マスウーディー作「人」1996年(H0328339)
アインシュタインのことばを訳して「不思議に思い驚くことができなくなった人間は、死人も同然である」と付されている

ハサン・マスウーディーのアラビア書道哲学

筆が驚くほど速い

古典的なアラビア書道は日本の書道と違いが少なくない。まずは道具。アラビア書道では筆(アブ・ハサド)を用いる。次に作法。アラビア書道では複数回なぞることはもちろん、不揃いな部分を刃物で削って修正しても問題ない。最後に書体。書



アブドゥ・ムハンマド・エル=ガマル作
「クルアーン第26章78～82節」ヒジュラ暦1441
(西暦2019～20)年(スルス書体、H0328247)

古典的なアラビア書道では、ゆっくりと時間をかけて一文字一文字を仕上げていく。対して、マスウーディーの筆は驚くほど速い。平らで幅広の毛筆やボード紙を手にとり、インクを紙に素早く広げる。細かい縛りが多い古典的なアラビア書道は、彼の手によって、のびのびと自由な線として解き放たれた。

誰もが「読める」

マスウーディーの目標はアラビア文字を読めない人にも書の魅力を伝えることである。彼はアラビア書道に万人の心を打つ魅力があると確信している。書道作品にはことばを記述する以上の力がある。形や色もまた作品の意味を伝える。書を「読む」には、ことばだけでは伝わらない、感情や感性の次元の理解を要する。誰もが「読める」作品を制作するために、マスウーディーは書と画のあいだにあるカリグラフィの両義的な立場を活かしているのだ。

彼の作品は純粋な書でも、画でもない、イメージとテキストを往還する中間的な存在である。たとえば語として把握できなくても、ことばはわたしたちの知覚に働きかけることができるのである。(訳・相島葉月)

エモン・クライル ベルギー・ゲント大学 准教授

体ごとに定まっている幾何学的な比率に厳密に従って文字を書くことに重きを置く。

(例えば、エル＝ガマルの作品)

しかしイラク出身でパリ在住のアラビア書道家ハサン・マスウーディーは、こうしたアラビア書道と日本の書道の表層的な違いを克服するだけでなく、両者を結びつけてきた。彼は文字を「書く／描く」という同じ芸術の二つの表現としてとらえたのだ。



SMS機能がついたイランの携帯電話。ペルシア語は改良アラビア文字を用いている（2014年使用、個人蔵）

筆者が二〇〇四年夏にイラン・テヘランのペルシア語学校で学んでいたときのこと。あるとき先生は、イランでの携帯電話の使い方について、「ショートメッセージ（SMS）でやりとりするときは、『ピングリッシュ』とよばれるペルシア語のローマ字表記を使っています」と言った。そのとき筆者がイランで持っていた携帯電話は安価で古い機種だったのでSMS機能は付いておらず、ピ

ングリッシュを試す機会はなかった。ところが、その翌年からアメリカのロサンゼルスでフィールド調査を開始すると、携帯電話を用いたピングリッシュのSMSは欠かせないものになった。ペルシア語のラテン文字表記はイラン国内と国外に在住する人びとのコミュニケーション手段としても重宝したようだ。

ペルシア語に英語の語彙が混ざっていても違和感はない。そしてピングリッシュにより、独特のことば遊びも可能になった。例えばイランでは日常的な感謝の意をあらわすのにフランス語由来の「メルスィー」という語を使うが、これを「mer30」と表記する。ペルシア語で三〇の発音が「スィー」に当たるのだ。スマートフォンが普及した二〇一〇年代

初頭からは機種同士の互換性が高まり、ペルシア語でのSMSもアラビア文字で交わされるようになった。しかし、国外生まれでアラビア文字での読み書きができないイラン人と、国内に住む親族が連絡を取るような場面では依然としてピングリッシュが使われ続けている。



スマートフォンのペルシア語キーボード。2010年代よりソフトウェア開発が進んだ（2024年）

ピングリッシュでつながる「イラン」

つばきはらあつこ
椿原敦子

龍谷大学 准教授

カティ語にあてた字の例

- چ بەلشیا 語で用いている /tʃ/ 字の借用。
چ /dʒ/ の1点を3点に増やしたのか。
- خ پاشتو ー語で用いている /ts/ 字の借用。
خ /tʃ/ の3点を引っ繰り返して上に出したのか。
- ج ساینډی ー語で用いている /ʃ/ 字の借用。
ج /dʒ/ の点の下に1点を追加したのか。

چ	خ	ج	خ	ح	ج	
			x	h	dʒ	アラビア語
		tʃ	x	h	dʒ	ペルシア語
ts	ts	tʃ	x	h	dʒ	カティ語



調査地とはちょっと異なる方言がベースとなっている『カティ語の文字 (kata varī alif bā)』(カティ語保護協会、2022年、パキスタン)

文字を作る、文字を選ぶ

よしおかのぼる
吉岡乾

民博 准教授

言語の地位向上のために、文字を作ろう。文字を持たない話すだけの言語と文字を持ち読み書きもする言語とで、後者のほうが偉いのだと勘違いしている人は世に多い。そういう思想の人が参画したり、そういう人の目を気にしたりすると、冒頭のような発想が言語運動の初段階で差し挿まれがちである。

僕の調査しているパキスタン北部の言語は実質的な無文字言語ばかりだ。が、昨今、ブルシャスキー語、カティ語、シナー語などで地元民らによる文字開発が目論まれている。そこそこの権威を笠に着用して文字を考案し、普及のための冊子が作られるのを定石として。

ラテン文字（ABC）のように、子音も母音も、基本的に一字一音対応で発音を綴る文字体系を「アルファベット」という。ギリシア文字やキリル文字などもそう。一方でアラビア文字はアルファベットでは

なく、基本は子音だけを一字一音対応であらわす体系「アブジャド」である。他にヘブライ文字やフェニキア文字などもアブジャドだ。古の

ネットスラングにkwa（詳しく）や gots（ぐれカス）などがあったが、日本語をアブジャド風に表記したらこんな感じになる。

正則アラビア語には母音が三つしかないが、カティ語は六つ、ブルシャスキー語やシナー語もそれぞれ五つの母音があるので、子音しか書かないのはかなり不便である。kwaは「詳しく」とも「川崎」とも「木を割け」とも「壊すか」とも読める。

けれども彼らはアラビア文字を工夫して採用したがる。イスラーム教徒だもの。



キリスト教宣教師が考案するとラテン文字が使われる『ロトウマ語を学ぼう (Rak la faeag Rotuam)』(先住民信託基金局、2014年、フィジー)



他の言語では使わない ۛ なども見られる『コワール語教本 (khowār kitāb) 4年生』(カイバル・パクトウンクワ州教科書局、2023年、パキスタン)

資料解説

グラフィックデザインとしてのアラビア書道

書は文字のアート。書かれたことばよりも画としての表現に重きを置く。だが、20世紀の印刷技術の向上に伴い、広告や商品ラベルなど「読める」書としてのデザインも書家の仕事に加わった。(相島 葉月 民博 准教授)



映画『そして日常が戻った』パンフレット (1976年制作、エジプト、H0328191)

映画宣伝もアートな文字で人びとを魅了

エジプトは「ナイルのハリウッド」とよばれるくらいに映画産業が盛んだった。書家は映画のポスターだけでなく、作中の題字やクレジットも担当した。

映画『ハラルは勝つ』ポスター (1985年制作、エジプト、H0328250)



商品ラベルにもアラビア書道

- 1 「雄鶏印のロウソク」商品ラベル (1960年代推定、エジプト、H0328215)
- 2 ターハー・マフルーフ社の紅茶「セイロン・フラワーズ」の箱 (1950～60年代推定、エジプト、H0328232)
- 3 乳製品店のチラシ (エジプト、H0328212)

H・Cからはじまる番号は本館の標本資料番号です。



イザベラ・ウフマン作「太陽からの一筋の光——真実・正義・秩序」 2022年 (H0328159)

作品解説

レターリアリティの表現世界

古代エジプトのヒエログリフは文字でもあり絵でもある。その一例が右に掲載したネフェルタリ墓の壁画だ。ここには「マアト女神の語ることば。“(わたしの) 娘である大王妃ネフェルタリ、ムウト女神に愛されし者、声正しき者を(わたしは) お守り致します”」という内容のヒエログリフが書かれている。

このヒエログリフでは、主語である「わたし」の語が省略されている。だが、よく見ると、主語が書かれるべき位置に「わたし＝語り手」である「マアト女神」の絵(正確には顔の部分)が描かれていることがわかる。ヒエログリフの文字を英語でサイン (sign) というが、それはこの壁画にあるように、文字でもあり絵でもあるというヒエログリフの特徴をとらえてのことなのだろう。

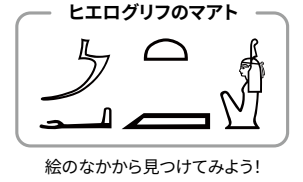
壁画の修復師という経歴をもつウフマンの描く表現世界は、古代エジプト文明で使われていたサインのあり方に着想を得たものとなっている。

彼女の作品「太陽からの一筋の光——真実・正義・秩序」では、マアト女神の絵を中心に、「真実・正義・秩序」を意味するアラビア文字と、同じ意味をもつヒエログリフのマアトとが、絵としても文字としても立派に成立している。

このようなウフマンの作品は、古代エジプト人の作り上げたサインの観念にアラビア書道を融合させた新しいスタイルの美術だといえる。彼女自身はそれを LETTEREALITY (LETTER文字+ REALITY現実、中央のRが両単語に及んでいる) と名づけている。(永井 正勝 筑波大学 教授)



この円はアラビア文字の⑥であるとともに太陽を意味するヒエログリフ⑤でもある



両手を広げるマアト女神の絵と彼女のことばを記したヒエログリフ (エジプト ネフェルタリ墓、2022年、ナイルウインド提供)

みんなく 回覧板

イベントの詳細・予約はこちら

みんなくホームページ
催し物のご案内
<https://www.minpaku.ac.jp/event/>



各イベントについて、
詳しくはホームページを
ご覧ください。

みんなく創設50周年記念特別展

民具のミカタ博覧会

——見つけてみつけて、知恵の素
本特別展では、日常の生活で必要な
ものとしてつくられ、使用されてき
た民具について、くらしのなかの美
の造形として紹介します。
会期 3月20日(木)祝～6月3日(火)
会場 特別展示館



EEMが収集したウガンダの酒壺
(2009年、K0006728)

■関連イベント 公開シンポジウム

コレクシヨンの系譜学

日時 3月30日(日)13時20分～16時
25分(12時30分開場)
会場 本館2階第5セミナー室
(定員50名)
講師 加藤幸治(武蔵野美術大学 教授)
神野善治(日本民具学会 会長、
武蔵野美術大学 名誉教授)
川村清志(国立歴史民俗博物館
准教授)
日高真吾(本館 教授)
西まどか(編集者)
参加費 無料(展示をご覧になる場
合は展示観覧券が必要)
※事前申込制、先着順
【申込期間】
2月1日(土)～3月24日(月)
※オンライン(ライブ配信)でもご参
加いただけます。(定員450名)
※詳細は二次元コード
(QR)からご確認ください。

みんなく映画会

みんなくワールドシネマ

『セールス・ガールの考現学』
日時 2月24日(月)祝13時30分～16
時40分(12時30分受付・開場)
会場 みんなくインテリジェントホー
ル(講堂)(定員350名)
上映作品 「セールス・ガールの考現
学」The Sales Girl(2021年
解説 島村一平(本館 教授)
司会 黒田賢治(本館 助教)
参加費 要展示観覧券(イベント参
加費は不要)
※事前申込制(本人を含む2名まで)、
先着順
※事前申込の方は、当日12時30分
から本館2階会場前にて展示観覧券
を確認後、入場いただけます。
※受付期間中に定員に満たない場合
のみ当日参加を受け付けます。
【申込期間】
▼一般受付 2月19日(水)まで
※友の会先行受付は終了しました。



カフェの看板
(イラン、2019年、黒田賢治撮影)

みんなく創設50周年記念企画展 (MMP)のワークショップ

——点と線の美学
アラビア書道の軌跡
「コミュニケーションのデジタル化が
進む今日、20世紀以降のアラビア書
道の変容と再生の軌跡から、手で文
字を書くことの社会的役割について
探求します。」
会期 3月13日(木)～6月17日(火)
会場 本館企画展示場

みんなくミュージアムパートナーズ (MMP)のワークショップ

——点字体験ワークショップ
日時 2月8日(土)、3月8日(土)
12時～15時30分(最終受付15時)
会場 本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料、当日随時受付
みんなく創設50周年記念
国際シンポジウム

22世紀のミュージアム

未来のコミュニケーション空間を 創造するー

情報技術は、博物館でどのように活
かされ、博物館をどのように活かし
てくれるのか。時間と空間、コミュニ
ケーションをキーワードに「メデイ
アとしての博物館」の未来のかたち
を語り合う。
日時 3月8日(土)13時30分～17時
(13時開場、9日(日)9時30
分～17時9時開場)

会場 みんなくインテリジェントホー
ル(講堂)(定員400名)
趣旨説明 宮前知佐子(本館 助教)
言語 日英同時通訳
主催 国立民族学博物館
【申込期間】 3月5日(水)まで
※事前申込制、先着順、参加無料
※オンライン(ライブ配信)でもご参
加いただけます(定員500名)。
※詳細は二次元コード
(QR)からご確認ください。
お問い合わせ先
museum2@minpaku.ac.jp



不安の時代

——若き人びとの心のゆくえ

不安の時代を生きる若年層。グロー
バルな状況を敷衍しつつ、ローカル



鼎談 イサイアス・ヒメネス、山本正宏
(LAVAN)、鈴木紀
主催 国立民族学博物館、科研基盤
(B)鈴木紀「ラテンアメリカ
の民衆芸術に関する文化人類
学的研究」(2021.4-2025.3)
【申込期間】
2月10日(月)～3月10日(月)
※事前申込制、先着順、参加無料
※詳細は二次元コード
(QR)からご確認ください。
お問い合わせ先
moto@minpaku.ac.jp



2月9日(日)14時30分～15時30分
欧米の博物館における
アフリカ資料
話者 飯田卓(本館 教授)

3月9日(日)14時30分～15時15分
世界の文字をたった45分で!?
話者 吉岡乾(本館 准教授)

本の紹介

丹羽典生 著
『ガラバゴスを歩いた男
——朝枝利男の太平洋探検』
教育評論社 2,640円(税込)

朝枝利男は何者か。「ガ
ラバゴス探検の日本人
のバイオニア」でありな
がら、ほぼ無名の人物
である朝枝利男の残し
た膨大な写真・スケッ
チを交えながら彼の生
涯を解き明かします。



共催イベント
いま、中東世界で何が起こっ
ているのか?
——前・駐レバノン大使に聞く
中東外交の第一線で活躍してきた前
大使の体験をもとに、中東世界の深
層を知り、地球社会のメンバーとし
てこれからの世界とともに考えます。
日時 3月22日(土)
13時30分～16時(13時開場)
会場 みんなくインテリジェントホー
ル(講堂)
はじめに 西尾哲夫(本館 名誉教授)
講演 大久保武(前・駐レバノン大使)
対談 大久保武、鷺見朗子(京都ノ
ートルダム女子大学 教授)
主催 NI-HUGグローバル地域研究
推進事業「グローバル地中海
地域研究」
共催 国立民族学博物館
公益財団法人千里文化財団

物館づくりに費やしてきたような気がします。
私の研究の軌跡を振り返ります。



アフリカ展示場で自身の映像と「再会」するヨセフ・ヒリ氏 (2019年)

みんなくウィークエンド・ サロン——研究者と話そう

会場 本館展示場(ナビひろば)
※定員なし(ご自由に参加いただけます)
※申込不要、要展示観覧券(一般580円、
イベント参加費は不要)

【申込期間】
2月4日(火)～3月14日(金)
※事前申込制、先着順、参加無料
※詳細は二次元コード
(QR)からご確認ください。
お問い合わせ先
友の会事務局千里文化財団
minpakutomo@senri-f.or.jp



みんなくゼミナール

会場 みんなくインテリジェントホール(講堂)
参加無料

第554回
2月15日(土)13時30分～15時(13時開場)
道具資源としての植物利用
——バスケットリーから考える

講師 上羽陽子(本館 准教授)
人類はどのように植物を採取・加工・利用し、
用具や器物をつくってきたのでしょうか。バス
ケットリー製品の編み材・結束材に注目し、道
具資源としての植物利用について考えます。

第555回
3月15日(土)13時30分～15時(13時開場)
「知のフォーラム」をめざした
博物館づくり
——みんなくとの50年、みんなくでの37年

講師 吉田憲司(本館 館長)
私と民博との関わりは、出入りを始めてから
50年、着任から37年になります。その間、
多くの時間を「知のフォーラム」をめざした博

友の会

講演会・セミナーへのお申し込みは友の会ホームページ内の受付フォームをご利用ください。

お問い合わせ先 国立民族学博物館友の会(公益財団法人千里文化財団)

電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716
E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/

友の会講演会

参加形式：会場もしくはオンライン配信
友の会会員：無料
一般(会場参加のみ)：500円
※事前申込制、先着順
※会員は会場参加の場合、事前申込不要

第557回 2月1日(土)13時30分～15時
GHQによる神楽台本の検閲
講師 鈴木昂太(本館 助教)
会場 本館2階第5セミナー室(定員70名)

第558回 3月1日(土)13時30分～15時
布のオーセンティシティは
誰が決めるのか
——インドの染色品アジュラクとその職人
講師 金谷美和
(国際ファッション専門職大学 教授)
会場 本館2階第5セミナー室(定員70名)

手仕事でつくられる伝統的な布工芸品の
オーセンティシティ(正統性、本物らしさ)は
誰が決めるのでしょうか。アジュラクは、イ
ンドの職能集団カトリーによって地域の牧畜
民男性のために製作されてきました。アジュ
ラクのオーセンティシティとアイデンティティ
をめぐる職人たちのせめぎあいについてお話
します。

第88回 体験セミナー

コーヒー賛歌
——香りを聞き、音を味わう

日程 3月16日(日)13時30分～17時
講師 水川佐保
(UCCコーヒーアカデミー 専任講師)
西尾哲夫(本館 名誉教授)
岡本尚子(本館 特任助教)
岡本祥子(ピアニスト)
会場 UCCグループ神戸本社9階ラウンジ
協賛 UCCジャパン株式会社
※飲み比べ・レクチャー・演奏会の3本立て企
画です。詳細は友の会ホームページをご確
認ください。
【申込期間】 2月21日(金)まで(事前申込制)

居館の扉(ザンジバルドア)

標本番号 | H0170832、H0172371(扉用 止め金)

地域 | タンザニア ザンジバル島

展示場 | アフリカ



✦ 推しコレポイント ✦

しっかりした作りで、ぱっと見れば嵌め込み式に見えないかもしれない。前から横から斜めから、いろいろな角度から見て建具の継ぎ目を探すのも面白い。



立ちあがれ！ ザンジバルドア

鈴木 英明 民博 准教授

港町の人ならある「推し」ドア

去年の3月にリニューアルしたアフリカ展示場に鎮座するのが巨大なザンジバルドアである。ザンジバルドアというのは、ザンジバルやモンバサといったアフリカ大陸東部沿岸、いわゆるスワヒリ海岸の港町でよく目にする木製の、彫刻などの装飾が目を惹く玄関扉のことである。類似の扉はアラビア半島やインド、マダガスカル島などにも広く見られ、インド洋を跨いだ歴史的な交流の痕跡を留めている。大きさや装飾など扉ごとに異なり、港町の人びとは町のどこかに必ずや「推し」をもっている。

さて、今展示場にあるドアは1989年度に民博にやって来た。わたしは2018年の着任なのだが、それ以前から民博に大きなザンジバルドアがあるのは耳にしていた。着任後も何人もの先生がドアのことを教えてくれるし、多分忘れたのか、同じ先生から何度も言われるので、収蔵庫に見に行ったことがある。

スチール棚が見えるだけ

担当者とは雑談をしながら迷路のような収蔵庫を進んでいくと、「これです」とその方が何となく申し訳なさそうに言うので、前を見上げた。ただスチール棚が見えるだけ。「え、どこです？」と聞くと、スチール棚の下を指差している。すると彼女はするすると腰を屈めていくので、彼女にならって下を覗き込むと、

あった！ どっしりと寝そべっているではないか。重いので、こうするしかないとのこと。よく見てみると、戸板などの建具が分解されている。釘を使わず嵌め込み式なのである。わたしはここ数年、いくつかの工房を訪ねているが、釘を使わず嵌め込み式ドアを作れる工房は残念ながら、もうほぼない。30年以上、民博にいるこのドアはそんなことを知らずに寝そべっているのだろうが、じつは非常に貴重なのだ。

このドアは以前にも展示されていたという。木製だけに素材の伸縮などで再びうまく嵌め込めるのかと若干心配だったが、組み立ては意外にもすんなりといった。扉の鉸は象牙でとされ、足元の錠は歴史文献などを総合すればインド製だろう。彫刻も丁寧だ。大きさは現地でも最大級。ザンジバル島にいたならば、まさに「巨館の扉」になって、誰かの「推し」になっていただろう。是非、再び立ちあがったザンジバルドアの勇姿を皆さんの目で直接見届けてほしい。



あるインド系イスラーム教徒コミュニティが隊商宿として建設した建物に残るドア（タンザニア ザンジバル島 ストーン・タウン、2009年）

ソロモン諸島で貝殻のお金をつくる

ふじい しんいち
藤井 真一

民博 助教

近い言語集団がいるソロモン諸島のなかでもマライタ島中西部に暮らすランガランガの人びとだけがおこなっている。もう一つの「つくる」は、ランガランガで作られた貝殻のお金を買い集めたり

もめごとを処理するときや結婚するときなどに人びとのあいだでやりとりされるもので、地域（言語集団）によって形状や長さ、使用する貝ビーズの色に違いがある。二〇二四年九月のみんなくウィークエンド・サロンで、わたしはこうした貝殻のお金を「つくる」ことについて話した。

ここでわたしが貝殻のお金を「つくる」という場合、二通りの「つくる」がある。一つは、貝殻を小さく砕き、穴を空けてビーズ状に加工したのち、紐に通して「お金」を創り出すこと。この「つくる」は、一〇〇



みんなくウィークエンド・サロンの様子
(本館ナビひろば、2024年)

二通りの「つくる」

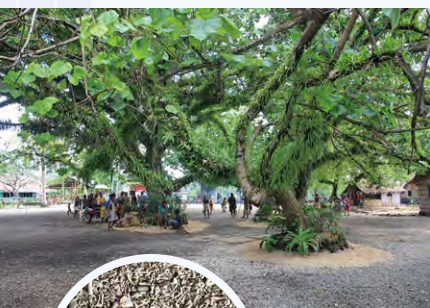
ソロモン諸島の一部地域では、政府発行の紙幣や硬貨とは別に貝殻のお金が使われる機会がある。貝殻のお金とは、直径五ミリメートルほどのビーズ状に加工した貝殻を紐におして作られた伝統的な貨幣（貝貨）のことだ。

誰でもお金持ちになれる？

して、各地域で使われている配列や長さで作り直すこと。わたしのおもな調査地であるガダルカナル島では、このタイプの「つくる」がよく実践されている。

こうした話をする、「なぜランガランガの人びとだけが貝殻のお金をつくるのか？」「頑張れば誰でも大金持ちになれるのでは？」といった質問が参加者から寄せられた。

なぜランガランガの人びとだけなのか。それは、彼らの住む島々が岩やサンゴを積み上げて作られた人工の島だからだ。人工島には畑作に十分な土がなく、イモ類や野菜を栽培できない。それゆえ、いろいろな機会に各地域でやりとりされる貝貨を供給することで、食糧などを買う資金を得ているのである。逆に、ランガランガ以外の人びとは貝殻のお金をつくらない。畑仕事のほうがずっと効率よく稼ぐことができるからだという。人間だしも、できるだけ頑張らずにお金を稼ぎたいのかもしれない。



ランガランガの人びとが暮らす人工島の陸地にはほとんど土がない(マライタ島中西部、2019年)



1〜3:貝殻を加工して「お金」を創り出しているところ(マライタ島中西部、2020年)

4:完成した10連・約2メートルの貝貨(首都ホニアラ、2018年)

船とボートとカヌーを乗り継ぐ島人の人生

佐本 英規 さもと ひでのり

筑波大学 助教

ソロモン諸島マライタ島南部のアレアレ・ラグーンに暮らす人びとにとって、おもな交通と運搬の手段は、船に乗り、ボートを操り、カヌーを漕ぐことだ。隣島の首都と結ぶ貨客船、沿岸の長距離移動や大荷物の運搬に欠かせない船外機付きボート、

日常的な往来に活躍する木製カヌー。人びとは、船とボートとカヌーを頻々と乗り継ぎながら日々を過ごす。

アレアレ・ラグーンでは、人生の折々の悲喜こもごもが、船とボートとカヌーとにもある、と言ってもいい。朝、子どもたちは一人用の小さなカヌーで、あるいは兄弟姉妹で權を連ねて、堡礁の島の小学校に内海を渡って漕ぎつける。首都の高校に進学した子どもたちは、学期が始まるころ、ラグーン南端の大きな栈橋までカヌーかボートで送られる。貨客船に乗ってしまえば、帰ってくるのは次の休暇だ。草サッカーの大会や大きな教会の祭礼の際には、方々から集まったボートとカヌーが内海に列をなす。食材の貝を集めにマングローブ林のなか、調理に使うココナツを採りに堡礁の小島まで、父親と母親はカヌーをすべらせる。畑仕事から戻り、子どもたちを寝かしつけ

た後、やっと一息とばかり、夜の内海にひっそりカヌーを浮かべ釣り糸を垂れる人がいる。急病人をのせて遠方の病院に急ぐボートを涙と嗚咽で見送ることもあれば、首都の病院で亡くなった家族を貨客船に乗せて連れ帰ることもある。キリスト教化に伴って失われた風習だが、一昔前は、カヌーに遺体を安置して樹上葬にしたともいう。

最近、大切な調査協力者でもあった現地の友人が、闘病の末に首都で没した。彼の息子は携帯電話で、これから村に連れ帰ると、貨客船に乗せられた棺の写真を送ってくれた。大きな栈橋まで船で運ばれた棺はきつと、ボートに乗せかえられて村に向かったろう。村を出て、堡礁の墓地まで棺を運んだボートは、弔いの人びとのカヌーに賑やかに囲まれていたに違いない。若い日にカヌーで漕ぎ出し、ボートと船を乗り継いで幾度となく海を渡った彼は、最後もまた、乗り継ぎ乗り継ぎ自分の土地に帰っていった。近いうちにわたしも、最初は飛行機だけど、同じように船とボートとカヌーを乗り継いで、堡礁の小島に眠る彼に会いに行こう。



ボートとカヌーを降りて、小さな貨客船の到着を待つ
(ソロモン諸島 マライタ島、2012年)

だって
調査だもの

リーブ・ミー・アローン

西川 慧 にしがわ けい
石巻専修大学 准教授



インドネシア

わたしは相部屋がちよつと苦手だ。二、三日であれば構わないのだが、それ以上のあいだ相部屋が続くと気疲れしてしまい、一人の時間が欲しくなる。

調査にうってつけの部屋

二〇一五年、わたしはインドネシア西スマトラ州でミンカバウの人びとが住む村落に滞在していた。わたしが住むことになったのは、オランダ植民地時代に建てられた（らしい）高床式の木造建築の部屋だった。天井が高く、木製の窓を開けると心地よい風が入ってきて、目の前には村の幹線道路が見渡せる。家の後ろにはモスクがあり、村の社会生活の中心に近く、調査にはうってつけだった。なにより、その部屋にのみ通じる出入り口があるため、夜遅く帰っても家の中央玄関を通らずに部屋へ戻ることができる。

わたしの入居に向けて修繕工事が始まった。そのままでも入居できる



村の遠景(2018年)

状態の部屋だったが、「せっかくの機会だから住み心地が良いようにしましょう」という家族の計らいだった。工事を担当してくれたのは、家具職人をしている親戚のおじさんだった。

泊まっていついていっ

晴れて部屋に入居した日の夕方、わたしはテレビを観ながら夕食を食べていた。そこに修繕工事をしてくれたおじさんがやってきて、「今日からあの部屋で寝るんだな。今夜泊まっていい？」と聞いてきた。

一泊だけのことだろうと思ったわたしは、「もちろん！」と答えた。その日の夜、わたしがこれから始まる長期フィールドワークに期待を膨らませながらノートを整理していると、枕と薄い毛布を持っておじさんがやって来た。近くの屋台から甘いコーヒーをテイクアウトして、二人ですすりながらいろいろな話をし、一、二時ごろ就寝した。布団はセットしかなかったが、おじさんは「お前の部屋だから」と言っ、木材の床のうえで寝た。

ところが、おじさんは次の日も、



住んでいた家の入り口(2015年)

その次の日も「来たよ」と言いながら部屋にやって来た。「あれ、毎日来るぞ……」。最初はおじさんが気にかけてくれることがうれしかったが、数日たつと疲れてきてしまった。調査データの整理もしたいし、なにより一日中誰かと一緒だったこともあり、夜は一人で過ごす時間が欲しい。それが贅沢なことだとはわかっているけれど……。

相部屋の日々

結局、わたしが家族に相談すると、「ケイは夜に一人で勉強する必要があるから」とおじさんに伝えてくれたらしく、夜の訪問はなくなった。あとからわかったことだが、村の未婚男性たちは、自宅ではなく友人たちと一緒に雑魚寝するのが習慣だった。「二人で寝ていて怖くないのか」



部屋の下は社交場(2016年)

と聞かれたこともある。おじさんは未婚だったし、わたしが寂しい思いをしないようにという配慮だったのだろう。

それ以来、おじさんは昼の仕事の休憩時間に来てくれるようになった。彼とはいろいろな話をした。おじさんは、ときには生活に必要な家具を作ってくれたりした。夜の訪問をやめてほしいと伝えた決断が正しかったのかわからない。今では、おじさんと相部屋だった日々が懐かしくてしょうがない。

部屋からの景色(2015年)
(写真はすべてインドネシア 西スマトラ州)

シッキムの金色のトウモロコシ

やまぎし てつや
山岸 哲也

東京都立大学大学院 博士後期課程

雨は休みなくトタン屋根を叩き、濃い霧があたり一面を覆っている。家のそばの段々畑に、春にまいたトウモロコシが実っているのが、かすかに見えるばかりだ。5月から続く雨季がまだ明けきらない、8月終わりのインド・シッキム州の風景である。

わたしは民俗宗教調査のために、村落部のある家族の家に滞在していた。部屋でインタビューの文字起こしをしていると、母(ホストマザー)が牛の世話を済ませて、長靴を脱いで入ってきた。母の手には、深い緑色の大きなイチジクの葉の包みがあった。中には所々黒く焦げた金色の焼きトウモロコシが、3つ入っている。焚き火で焼いただけで、何も味付けされていない。

「またノートかい? ひと休みして、美味しいうちに食べなさい」

「ありがとうございます。蛙は大丈夫ですか?」

「ああ、まだ足に何匹か付いてるね! もう忌々しい、消毒液をちょうだいな」

トウモロコシはシッキム各地で栽培されている。日本の品種と違って固いが、噛み締めるうちに、ほのかにやさしい甘みが出てくる。この村のトウモロコシは特に美味しいと評判で、人びとは収穫してそのまま市場で売ったり、自分たちで潰し固めて茶請けに加工したりもする。わたしは焼いただけの素朴な味が好きだ。

「もう雨はうんざりですね。シッキムの雨季がこんなに長くて大変だとは思いませんでした」

「雨季ももうすぐ終わり。そのうちすぐに寒くな

るけど、あんたの調査はしやすくなるよ」

2人で外を眺めていると、雨の音が次第に小さくなった。雲のあいだから差す青い陽の光が、霧を押し除けて向こうの山々の稜線をくっきりと照らす。母は「今のうちに夕食の支度だね」と言って、トウモロコシの芯をバケツに放り込むと、野菜の籠からエンドウ豆を取り、鞘をむき始めた。窓から入ったやわらかな光が、母を包んでいく。わたしは、作業をする母をしばらく眺めてから、文字起こしを再開した。歯に挟まったトウモロコシを舌でいじりながら。



上: 焚き火で焼いたトウモロコシ
下: トウモロコシ畑を耕す牛
(写真はどちらもインド シッキム州、2023年)

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発行人 山中由里子
編集委員 樫永真佐夫(編集長) 河西瑛里子
黒田賢治 中川理 奈良雅史 松本雄一
制作・協力 公益財団法人 千里文化財団
印刷 株式会社 研文社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係
にお願いします。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆油由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。



『月刊みんぱく』は 国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読のほか、友の会会員の方には毎月お届けします。

『月刊みんぱく』定期購読

本誌を1年間お届けいたします。年間をとおして、いつからでも始められます。



お問い合わせ

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するためにつくられました。本誌送付のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会(千里文化財団)までお問い合わせください。

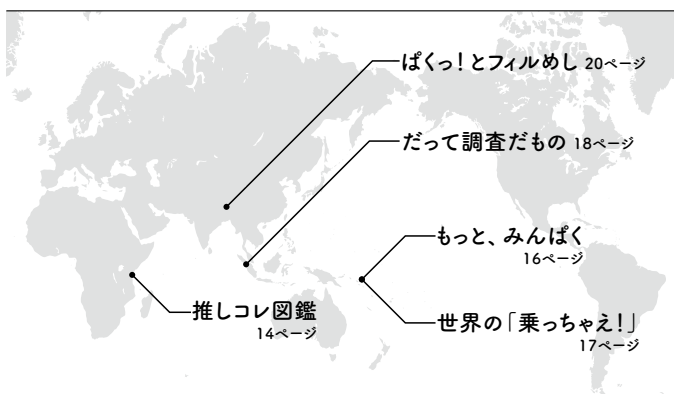
電話 06-6877-8893(平日9:00~17:00)

https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/



友の会

今月号の地図



編集後記

わたしにとってアラビア書道は画だ。点が二つ並んでいたら目だろうと思ってしまい、「いや、それは文字の一部で……」と聞けば、左から右へと目で図をなぞってしまう。だが、アラビア文字は右から左へと記すのである。もちろんことばとしてのメッセージはわたしにちゃんと伝わらない。ということからすると、アラビア語も読める人とわたしとは、本号の表紙と誌面から受け取る情報の質と量がまったく異なっているのである。また、アラビア語は読めるが日本語が読めない人にとって、本誌の画の部分と字の部分がわたしと逆である。そういう読者からの感想も楽しみだ。

さて、見開きになっている16、17頁に、ソロモン諸島の記事が並んでいる。

右が貝貨をめぐる話で、左がその貝貨の生産地マライタ島の人の水上交通の話、とうまい具合に関連性がある。じつはこれ、まったくの偶然。48年雑誌を続けていると珍事もおこる。(樫永真佐夫)



次号の予告 3月号

特集「旅と民具」(仮)



国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 電話 06-6876-2151

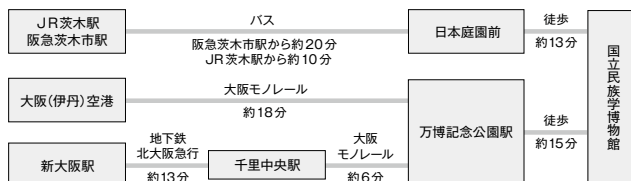
開館時間 10:00~17:00(入館は16:30まで)

休館日 毎週水曜日(水曜日が祝日の場合は直後の平日)
年末年始(12月28日~1月4日)

観覧料 一般 580円/大学生 250円/高校生以下 無料
特別展の観覧料金は、その都度、別に定めます。
※観覧料割引についてはホームページでご確認ください。

主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ

<https://www.minpaku.ac.jp/>



ひとりひとりのご参加が、 国立民族学博物館と友の会の活動を支えています。

国立民族学博物館友の会は、国立民族学博物館(みんぱく)の活動を支援し、積極的に活用するためにつくられました。21世紀は地球上のいたるところでおたがいを認めながら、ともに生きてゆく考え方が求められています。世界の暮らしの多様性にふれ、それを解き明かす文化人類学・民族学の知見がますます重要になっています。みなさまのご支援とご参加をお待ちしております。

訪れるたびに発見がある 博物館を 何度でも楽しめる

年間何度でも本館展示と特別展をお楽しみいただけます(一部の特別展は割引料金適用)。館内で開催する催しへの参加もスムーズ。研究公演など一部の催しの参加の参加会員優遇枠もあります。

さらに踏み込んだ話題提供 友の会講演会 年12回開催

人びとの営みの真髄にふれる 『季刊民族学』 年4回発行

友の会の機関誌。世界の諸民族の社会や文化に関する正確な情報を平易かつ読み応えのある文章、豊富なカラー写真で紹介する、あなたの知的欲求に応える市民向けビジュアル学術誌です。



最新の情報をいち早くお届け

『月刊みんぱく』 年12回発行

『月刊みんぱく』はみんぱくの広報誌です。展示や催しの情報のほか、資料の解説や現地の様子、調査の動向を親しみやすいエッセイやコラムで紹介します。



お問い合わせ、お申し込みはこちら

友の会はいつでも、どなたでもご入会いただけます。

国立民族学博物館友の会

公益財団法人 千里文化財団

電話 06-6877-8893(平日9:00~17:00)

入会方法は友の会ホームページに記載しております。

